
マジックソードオンライン (MSO)

レオとなごみ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

マジックソードオンライン(MSO)

【Nコード】

N9178T

【作者名】

レオとなごみ

【あらすじ】

世間ではVR技術が発展し、世界の人々はその精巧なヴァーチャルリアリティーバーチャルリアリティー（仮想現実）に心奪われVRを用いた技術が急速に発展していった。特にゲームのMMORPGにおいてVRを使用することで空想の世界を実現、ゲームの心を掴んで離さないまさに夢の世界を作り上げた。その中でも「マジックソードオンライン」という名前のVRMMORPGが絶大な人気を誇っている。中世のヨーロッパをイメージして世界が創られており、剣と魔法を駆使して戦う王道的なVRMMORPGである。このゲームの最大の特徴

は「技を編み出せること」ということである。この「技を編み出す」システムの名前を『スキルアートシステムSAS』という。このゲームの人気はこのシステムがあるからこそといっても過言ではない。そんなゲームをプレイするある一人の物語をこれから語ろう。

挨拶

はじめましてレオとなごみと申します。

この小説は自己満足な処女作となっております。

主人公が最強です。これは外せません。といつても努力に努力を重ねた結果、後に最強だということが発覚していくタイプのものです。SAOや「なるう」に投稿されているエデンといった小説を参考にしているため設定や話の展開、シーンで似通った場所があるかもしれませんが、ご了承ください。

エデンの作者であるりんごちゃん様にはキチンと許可をいただいております。SAOの作者にも許可をいただきたいのですが、まあ二次創作とか出てるし大丈夫だよな？

更新速度自体は非常に遅めなので、こんな小説あつたな〜程度の認識で時々更新されているか確認してもらえれば幸いです。

今回の小説が初作成、初投稿となるので自分でもこの先どうなるかわかっておりません。そんな自分の作品に

「大丈夫だ、問題無い（キリッ）」

「まあ、一応少しでも見てやるか（チラッ）」

といった心の広い方駄作ですがゆっくりしていつてください。

その他改良点や修正点がありましたらびしばし感想の方におよせください。自分の実力で出来る限り改良していこうと思います。もちろん普通の感想もお待ちしております。

ちなみに各話の文字数を3000字±1000字程度で頑張ってます。つていききたいと思います。

よろしく願います。

挨拶（後書き）

このサイトの投稿システムに慣れるためにテストも兼ねて投稿していきます。

第一クエスト（前書き）

お試し投稿です。

この小説はりんごちゃん様やSAOを参考にして作成した小説のた
め似通った部分が多く存在すると思いますが、ご了承ください。

第一クエスト

朝目を覚ますと最初に見た光景は天井だった。部屋の中を見渡すと質素な机に机とセットであるう質素な椅子、質素なタンスがあり木枠の窓から朝日が差し込んでいる。現代の日本に住んでいる自分の部屋とはかけ離れているこの部屋にももう慣れてしまったなと寝起きの頭で思った。ベッドから気だるげに体を起こし背伸びをする。

視界を下に移せば双丘が見えた。男の自分に存在するはずがない胸がそこにはあつた。これももう見慣れたというか馴染んだということが実に不本意ながらこの体が自分のものであることはこの世界に閉じ込められた二年間の経験で十分理解させられた。自分 柎終夜
はいつもの事ながら気が滅入ると思いつながら着替えを済ませる。

「そろそろ飯食いに行くかな」
そう言つて一階にある食堂へ移動した。

まだ早朝だけあつて食堂に人は2・3人と少なかった。特に親しい仲の者はいなかった。のでそのまま無視して食事をした。

食事を終えたら二年前からの日課になった鍛練たんれんをするために装備を整えて最寄りもよりのダンジョンに向かった。

墓場をイメージして作られてはいるが死者を盛大に弔うという設定だからなのかは知らないが中は松明たいまつが大量に設置されているため比較的明るいダンジョンとなっている。高Lvダンジョンの暗い場所では特定のアイテムが必要なため低Lv用のダンジョンであるここはダンジョンという場所に慣れる為に用意されたというのがプレイヤー間情報の最有力候補だ。

「しかし、ここまで広くて明るいモンスター達が些ちやか滑稽こっけいに映るのだが開発スタッフはそこらへんどう思ってるんだろうな」

と、意味もない愚痴をこぼしているとモンスターの姿が見えてきた。低Lvダンジョンだけありここに出現する敵はほとんどがノンアクティブモンスターである。まあ、さすがに最下層まで行けばボスは

アクティブであるし、その周りにいる敵も当然アクティブに設定されている。

今日も最下層でボスとその取り巻き連中相手に現在持っているスキルの熟練度上げていくのが鍛練の内容だ。

ある一定の熟練度に到達すると使用している武器別に次のスキルを習得していくシステムになっているが肝心の熟練度の確認ができないのだ。

武器別にスキル習得できるというシステムの関係上その道のスペシヤリストが出てくるのも当然の帰結である。しかし、この熟練度はかなり上がりづらいのか次のスキルを習得するのに多大な時間を消費する。万能型を目指している人にはなかなか厳しい道のりであった。

自分は魔法特化であるが少々特殊で発動媒体が銃の形をしている。銃の形をとっているだけならまだいい、しかしこの銃で扱える魔法スキルが無属性のバレットのみでなぜかブレードという剣を生み出す魔法しか使えないのだ。

この銃、最初は物珍しさで市場でも出回ったのだが使える魔法が初期魔法二つだけであつ威力も低いとなれば次第に使う人も少なくなつていき、ついには確認できる範囲では自分一人だけとなつていた。何故自分が今でも使用、愛用しているかという、恥ずかしい話になるが銃で魔法が撃つて剣で斬れる銃剣であつたということである。リテンションが舞い上がつていて使用していたため情報収集を怠り、気づいたら自分だけという状況だつたのだ。

いつも感じていた奇異の眼の意味を後でたつぷりと思ひ知つたよ。「おっと、過去の恥ずかしい記憶を思い返している場合じゃなかつた。

既にボス及び取り巻きと戦闘中なのに馬鹿なことを考えてる暇はないな

銃を二挺構える。二丁拳銃つてかつこいいよネ

ちなみに銃の銘は「バルス」だ。決してラピタではない

自分の戦闘スタイルは銃を使った近距離戦で名付けて「二挺魔銃近接格闘術」だ（キリッ）

・・・新たな黒歴史がまた1ページ

ていうかマジックソードって題名なのに魔銃とはこれいかにさて気を取り直して自分の戦闘スタイルの説明をするか。

名前と通り銃で近接格闘を行うスタイルだ。

銃でこまめにダメを稼ぎながら接近 接近したら相手の攻撃を受け流す 相手に弾・魔法の刃・丸・肘・脚・肩で攻撃して沈める超接近戦だ。

流派システムなんてのもあってこの戦闘方法を行っていたらいつの間にか自分の流派を作ってしまったっていてウィンドウ画面で「流派の名前を入力してください」って出た時はびっくりしたもんだ。さすがにスタッフも銃で格闘する流派はつくらなかつたようだ。しかしここってモンスターは弱いけど数が矢鱈多いんだよ。

常に囲まれないように戦わないと武器と戦闘スタイルの特性上すぐ死ぬ可能性がある。

なので、一体に集中攻撃を食らす 即離脱 次の標的へってな感じでやってるんだ。

この戦い方のコツを掴んだらその後は驚くほど集団戦が簡単になった。

今じゃ四体まとめて始末 離脱が可能になっている。

さすがにボス戦は周囲のモンスターを全滅させてからじゃないときついけどな

ここのボスモンスターであるビッグマミーが腕を振りかぶったのを確認してから攻撃をいなす準備に入る。振り下ろされる腕を右に受け流し懐に飛び込んで肘鉄を一発叩き込む、攻撃した勢いをそのままに相手の右側面に回り込みバレットを脇腹に三発撃ち込むビッグマミーが腕を横に振ってきたのを屈んでかわしブレードで足を攻撃、脚のバネを利用して飛び上がり蹴りを放つビッグマミーのHPがゼ

口になり消滅した。

ビッグマミーを倒してちよつとした休憩を挿めばまた雑魚がポップするので片っ端から薙ぎ倒していくとビッグマミーが再度出現してきたのでまた同じことを繰り返す。

昼時になつたら飯を食い鍛練を再開

夜も遅い時間まで続け街に帰還した。ドロップしたアイテムを店売りして知りあいが経営している店へと向かう。

「おいゝっす。繁盛してるか？シド」

「おゝ！今日もよく来たなりリイ！毎日の鍛練は終わったのかよ？
この店主であるシドは一番最初にグループを組んだメンバーの一人で料理系の流派に入った為一緒に狩りができなくなった代わりに毎日ここで夕食を食べるのが日課に加わった。

「いつも通りさ。」

「そうかいそうかい、それは結構結構。」

「シド、いつものメニューで頼むわ。これ代金な」

「あいよ、ゆっくりしていけよ。」

「そうさせてもらつよ」

やっぱりここは落ち着くなと思いつながら水を口にす。
椅子に体を預けて待っていると旨そうな匂いと共に料理が運ばれてきた。

「はいよお待ち！中華定食できたぞ。」

「いつも思うがなんでお前が運んでんだ？それなりに客はいるしウエイトレスも雇ってるのに・・・」

「それはおめー、昔馴染みには自分から渡したいからさ。」

「意味のわからんことを、第一昔馴染みってなんだよ、出会ってた二年で昔馴染みになれたら苦労しねえぞ。」

「ガツハハハハハ！そりゃ確かに！そんなことより折角作ったんだ、冷めないうちにさっさと食わんか」

「いや、食えなかったのはお前のせいだから」

「へえへえ、じゃ俺は退散するぜ」

シドは軽口をたたきながら厨房へ歩いて行った。

「ったくあいつは無駄話しかしねえな。まあいいいつものことだからな冷めない内に食っちまおう。」

そう言つて料理を口に運ぶ

「あいつのあの無駄話がなければ素直にこの料理の上手さを評価できるんだがな。」

まあ旨い飯を食わせてもらってるんだからそんな事は気にしないがと心中で思いながらも黙々と料理を平らげていった。

「ご馳走様。シド、今日も美味かったわ、ありがとよ。」

「毎度あり！明日もよろしくな！」

「ああ、また明日頼むわ。」

そう言い残し店を後にする

「さて帰ったら風呂入って寝るかな」

これが俺ことリリーのデスクゲームが始まってから続いている基本的な生活スタイルだ。

このデスゲーム自体はマスタークエストをクリアすれば脱出できる
みたいだから攻略組がいずれクリアすると思う。それまでこの平穩
(?)で楽しい生活が続くと信じて疑わなかった。この時まで俺は
そう思っていた。

第一クエスト（後書き）

どうでしたかね？

今回は現状説明で次回はこれまでの経緯とか書くことと思っています。
では（・・・）ノシ

第二クエスト（前書き）

今回はこんな状況に陥ってしまった流れを書いてみました。

こんなんでいいのが限りなく不安だ。

あとですね

1540アクセス、ユニーク564人

これを見たときは驚愕でした。

しかしあれですね。こういう実績みたいな形で結果が出るとやる気が鱚登りですね！駄菓子菓子！更新速度はあまり変わらないかな？とか思いながらいざ投稿！

第二クエスト

『マジックソードオンライン』は広大な土地が存在する世界最大のVRMMORPGとして世に出たのは二年前のことだ。

日本だけにとどまらず世界中でこのゲームを出来るようにと開発陣が頑張った結果当初の予定よりサービス開始は遅れたが無事スタートし世に出た。当時の俺も正式サービス開始とともにこのゲームのプレイを始めようと今か今かと待っていた。そしてついに時間が訪れアクセスを行いゲームを始めた。世界中のプレイヤーがほぼ同時に開始したと思うのだが俺の低スペックPCでもフリーズせずにはイスイ出来たのには心底驚いた。とまあ特にハブニングも無くゲームを進めて開始から四時間程度たって眠くなってきたから一度休憩しようとしてメニューを開いてログアウトを実行しようとした。そこで気付いた、ゲーム開始直後にあつたログアウトボタンが見当たらなかつたのだ。最初はバグかなにかだと思っていた。運営に連絡しようとしてメールフォームを開いてメールで運営に問い合わせようとしていたがメールを送ってから数十分たつても返事が来ない。かなり多くのプレイヤーがINしているようだから対応に追われているのかな？と思いつつながら狩りを続行、しかしいくら待てども運営から連絡は来ないまま二時間が経過していた。情報を手に入れようと戻った街の中は阿鼻叫喚だった。「なんでログアウト出来ないんだよ!？」

「知るか！俺に聞くな!」「運営はなにやってんだ!」「ここまで騒がれると逆に冷静になるってもんだぜ。

一応近くの奴に聞いてみるか。

「おい、この状況どうなってるんだ?」

「ああ!?!こつちが知りてえよ!」

いや、いきなりキレるなし。

こつち手合いからは速く離れるにことたことはない。というわけ

で即離脱！

「一体なんだってんだよ……」

困った時はとりあえず……

「狩るか」

いわゆる現実逃避である。そもそもここも現実ではないがな！

ところ変わってダンジョンの中

「初心者用ダンジョンなのにここ敵湧きすぎだと思っ今日この頃」
いやそもそもここに来ること自体今日が初だったりするんだが。

「街での騒ぎに関連してんのかな？人がいない。」

だれもないダンジョンで狩りをするほどつまらないものは無いな。

元々ソロプレイが基本の俺が言えたことではないがな。

二時間ほど狩っただろうか？この世界に時間の概念がないのとダンジョンの中ということで大体しか分からないがそろそろ街のほとぼりも冷めてきたかと思っ街に帰還することにした。

街の様子見してみればまだ変な熱気に包まれているようだったが先刻のような阿鼻叫喚の様相ではなくなっていた。

これなら多少は情報が聴けると思っ肝が据わってそんな奴を探して何が起っっているかを聞いてみた。

「なあなあそのダンディなおっさん。」

「ん？俺か？」

「そうそうあんだ。聴きたいことがあるんだ。今このゲームで何が起っってるんだ？」

「は？嬢ちゃん、そんなこともわからんのか？」

「（じよ、嬢ちゃん・・・）あ、ああ今までダンジョンに籠ってて現状把握が出来てないんだ。な、教えてくれよ。」

「はあ、呑気な嬢ちゃんが居たもんだ。いいか今このゲームはログアウトが出来ない状態なんだよ。んでそのあと恐らく全てのプレイヤーに変なメールが届いた。嬢ちゃんにもメールきてないか？」

「ちよ、ちよつと待つてくれ、今確認する。」

急いでメールボックスを開いて操作、確認する。

「あ、あつた新規メール。」

いつの間にか着ていたメールを開く。

「え〜と何々？・・・え？」

その内容は

「信じられんか。そりやそうだ現在進行形で俺もにわかには信じがたい。だがログアウト出来ない事が恐らくこれが今の事実であるという証拠だろう。」

信じたくないかし

「なんでこんな・・・」

認めるしかない事実を突きつけられていた。

くようこそ、限りない可能性の世界へく

このたび『マジックソードオンライン』にご参加頂いたプレイヤーの皆様、誠にありがとうございます。この『マジックソードオンライン』がこれからはあなたたちの現実となります。本当の現実への回帰を果たしたいならば物語をお進みください。もちろん残りの余

勢をここで過ごすことも可能です。皆様にはここで自由な生活を
して頂きたくこのような形式に致しました。それでは皆様『マジック
ソードオンライン』を存分にお楽しみ下さい。

尚、このゲームを現実と仮定しています。この世界での死は現実
世界での死に直結致しますのでご注意ください。

メールを読み終えた俺は目の前が真っ暗になるような感覚に陥った。
何故何故何故と思考が固まっていく。

不意に頭に衝撃が走った。誰かに殴られたようだ。それを行った人
物に文句を言おうと頭を上げれば今度は頭を乱暴に撫でられた。

「気をしっかり持て嬢ちゃん、こんな状況だ錯乱した奴が危なくな
る。だから気をしっかり持て、自分でちゃんと考えて行動しろ、そ
うすればそうそうにこの世界からおさらば、なんてことにはならな
いさ。」

そんなことをおっさんが言ってきた。

「・・・ありがと、ちよつと頑張ってみる。」

精神的に辛かったがおっさんのおかげである程度は回復できた。こ
んな男に俺もなりたいね。

「どういたしまして。あ、ちなみに俺はシドって言うんだよろしく。」

そう言って手を差し伸べてきた。

「あ、お・・・“私”はリリイよろしく。」

そういつて俺も手を握り返した。

「ここで会ったのも何かの縁だ、フレンド登録しないか？」

フレンド申請が飛んできたのでそれに応じる。

「はい、よろしくお願ひします。」

ここでふと、本当にちよつとした考えがよぎった。

「なあおっさん・・・じゃなかった、シド一つ聴きたいがまさかこうやって人脈作ってる？」

「お、ばれたか。なんだ結構頭廻るんじゃないかねえか、関心関心。なにやら自己完結してウンウン頷いてるシド。」

「もしかして私掛かった？」

その問いかけに実にいい笑顔がサムズアップで返ってきたことに肩を落としがつくりきたのは誰も責められないと思う。

「じゃあ俺はこれから自分の地盤作りに行くわ。なんか有ったら連絡しろよ。」

と、言いながらシドは歩きだした。

「ああ！私はL.Vの底上げしてるからそっちこそなんか有ったら連絡よろしく。」

「はっ！情緒不安定な嬢ちゃんに出来る相談なんてねえよ。」

その言葉には嫌味なところは含まれておらず軽い言葉のキャッチボールのようだと感じた。

「うわ、ひどい！」

私がそんなことを言うとシドがガハハハ！と歩いて行った。

「さてと、とりあえずなんで俺は“私”なんて言っちゃったんだ？性転換願望なんて俺には無いはずだが・・・？まあゲームのキャラに成りきったほうがやりやすいかな。」

等と思いつながらこのゲームを本格的に始めた。

まだあのメールからのシヨックは抜けきらないがこの時俺（私）は心躍っていた。日常から飛び出し非日常に飛び込んだのだ。不謹慎だが、この世界での冒険に期待で胸を膨らませていた。

ここから私（俺）の新しい物語が始まるだ、と。

第二クエスト（後書き）

どうでしたかね？二時間程度で仕上げたので誤字脱字あるかもしれ
ない・・・

第三クエスト（前書き）

え、更新が遅くなり大変申し訳ありません。

就職関連で執筆が出来ない状態でした。（言い訳乙

明日から仕事をする事になりましたのでこの状況に慣れましたら更新は安定するようになると思います。

これからもこの小説をよろしく願います。

ちなみに主人公リリーの銃のモデルはマテバM・M2007です。
かつこいい銃を探していたらいいのがあったので

では第三クエストをどうぞ

第三クエスト

今日も一日が始まった。

今日も今日とて狩りの一日を始めるか。

「（しかしいつもいつもあのダンジョンだけで狩りをしてるとなんだかこう刺激が足りないというかなんとというか・・・気分転換が必要だな。そうだな今日は久しぶりに市場にでも顔を出すか。なんかいい装備でも出回ってれば買うかな、金は十分あるし）・・・よしそうしよう。」

ん、やっぱり予定変更午前中だけ狩って午後から久しぶりの情報収集に徹しよう。ついでに回復アイテムの買い足しと市場に出てる装備品を漁るかな。

午前中は予定通りいつものダンジョンに潜り一対多の戦闘訓練をモンスターで行いボスモンスターで一対一の戦闘訓練を行う。もちろん全てこの二年間で積み上げてきた戦闘の基礎の型（基礎といっても型は単独、複数戦用の型の二つのみ）で敵を屠っていく。

「よし、行くかな。」

午前での狩りを終え、昼食を済ませてから街に戻った。

宿屋の近くにあるこじんまりした市場に向かう。

「この市場には何故か良質な装備やアイテムが出回ることが多く、宿屋を決める最大の要因になったのがこの市場だ。」

「や、タバタおはよう。」

「おや、リリイじゃないか、おはよう。今日は装備品漁りかい？」
こいつはタバタ、シド並みの情報網を構築しているプレイヤーである。こいつとシドのおかげで情報に困ったことはないくらいだ。同時にタバタは商才もあり普段はその情報網を活用し、武具を効率良く集め武具屋を開いている。

「まあ、そんなところだ。早速で悪いが私に合う防具は有るかい？今日は軽いやつをお願いしたいんだが。」

「そんなタバタの集める武具に私もお世話になっている身で常連の人だ。」

「そうだね。ちょうど今仕入れたものでいいものがあるんだ、えっと、これだな。胴体の最低限を覆うようにして作られてるから重さもさほど無いんだ。それでこれが能力値だね。」

「そういつて表示されたウィンドウを覗きこんだ。」

「へえ、なるほどなるほど中々いいステしてるね。」

「でしょ？追加武装で手甲と足甲がついて防御の心配は無し、軽いしこれならリリイの要望を叶えられると思う。これは中々買いたと思うよ。どっ、買っつ？」

「そうだね、じゃこれ貰うよ。いくら？」

「オーケー！そうこなくっちゃね。そうだね常連ってことでそうだね、30Mでどう？」

「うお！やっぱりそれなりのお値段だね・・・」

「そりゃそうさ、なんせ最近発見されたばかりの装備でしかもフルセットだからね。」

「まあフルセットでこれなら十分買う価値有りだね。」

「だろ？能力値補正、重さ、防御力全てにおいてリリィにぴったりな装備だよ。」

「こんないのほんとに今仕入れた品なの？タバタ」

「そうだよ、今仕入れたんだよ。」

「まあそういうことにしておくわ。ありがとねタバタ。」

「毎度有り。」

タバタに礼をして立ち去る前に本来の目的である情報収集をすることにした。

「そうだ、タバタ話は変わるんだけどマスタークエストってどれくらい進んでるんだ？」

「ん？そうだね、今は69階ってところかな。最近は進行がめつきり遅くなってるね。」

「ん？そうだね、こ一年で20階で2、3か月で3階だけってことだよ。」

「そう、ボスより雑魚に手間取ってるらしいよ。雑魚のLvが相当上げて来てるみたいだね。今はトップギルドのメンバーもレベル上げに徹してるって情報だよ。」

「なるほどね。行き詰ってるね。」

「今日のご要望は以上かな？」

「ああこれで終わりだ。」

「毎度1Mになります。」

「ん、はいさ。またなんかあったなお願いねタバタ。」

「了解了解。・・・ねえ、一つだけ聞きたいんだけどいいかな？」

「んにゃ？なにかな？」

タバタが私に質問だなんて珍しい

「マスタークエスト攻略する気ない？リリイなら結構いけそうな気がするんだけど？」

唐突にそんな質問をされると思ってたよタバタ

「私は私の物語の主人公をやりたいだけであってこのゲームの舞台に立つ気はさらさらないよ。タバタは私の性格をこの二年間できちり把握しているものだと思ってたけど？」

「そうなんだけどね、リリイの腕前知ってるこつちとしてはトップ連中の度肝抜かれた姿と威風堂々としたリリイの姿が見たいなんて思っちゃうわけだね。」

「あゝ無理無理私があの中での度肝抜くとかありえないから。あんな光輝いてる連中になんて覚えられたくないし。」

「ふむ、では容姿が分からなければどうかな？」

「はい？」

いきなり不思議なことを言い出すタバタ

「だから、容姿が分からなければ問題はなにかい？君だってプレイヤード、物語の中心にいたいという気持ちは少しぐらいあるだろう？」

「それは、そうだが・・・」

さっきはああ言ったが実際は混ぜりたいもう本気と書いてマジで混ぜりたい。しかし、そうすると必然どこかに所属しなくてはならないのではないだろうか？一人だけソロがいては連携に問題が出てくる。そうなるのと雑魚はともかくボス戦では危なくなる。何処かに所属するのが苦手な私ではきついものがある。

「それでさ、自分の特徴をあやふやに認識させるフード付きマントなんて装備があるわけだが・・・どう？」

「いや、いきなりどうって言われても・・・」

こいつの考えてることはいまいちわからんな。

「今なら700Kにしておくからさ！ねえ買わな〜い？そして介入しな〜い？」

ぐぐぐつと顔近付けてくるタバタ

「わかったわかったやってやるから！顔をそれ以上近付けるな！」

「いやつた〜！これで面白くなるぞ〜！」

なんか勢いに押されただけのようないきなりあえずこは・・・

「ただし！」

釘を打っておくこととしよう。

「ほえ？」

「これは一応常備しておこう何時何が起こるか分からないからだか

介入するのはどんなに早くても75階をトップギルドの連中が攻略してからだ。」

「え〜!?なんでなんで〜!?今すぐ介入しようよ〜!」
こいつの性格ってこんなんだったっけ?

「だめだ、こんな装備をしたままの状態での戦闘に慣れていない。私は装備が特異すぎる。この武器を他の人が使っているのを私は見たことがない。よってこれから本来のリリイとは違う戦闘スタイルを確立した上である程度の練度がなければとてもあの階層ではやっていけない。」

「む〜そうか。ってことはしばらくはまたあのダンジョンに籠るの?」

少しは興奮が冷めたようだ。

「そうなるね。この二年で積み上げたものとは違うものを一から作るのは並大抵では絶対に達成できんから街に戻ってくる時間も少なくなるな。」

かなりの覚悟を決めて動かないとな私も。

「・・・っていつかさリリイ?」

タバタが実に不思議そうに聞いてきた。

「なんだ?」

「かなり本格的にやる気満々だね。さっきまであんなに嫌々って言うってたのに。」

「い、いやあ〜これはだな・・・あ〜」

痛いところを突かれどもる。

「実はリリイってばノリノリ?」

心底楽しそうにからかいを込めた声で詰め寄ってきた。

「あ、えっと・・・あ〜はいはい降参降参、そうだよちょっと楽し

みだよ！それがどうした！」

「いや〜リリイは可愛いね〜お姉さん大感激！」

「誰がお姉さんだ！もういいさっさとその装備を寄こせ！明日から籠るからな！」

そういつて私はそうそうに立ち去った。

「フフフ、頑張って〜」

なんて声が聞こえたような気もしたが無視だ無視！

しかし、介入ね〜こんな認識阻害機能付きの黒いマントを羽織って、謎のプレイヤーを名乗って颯爽と現れて颯爽と消えて神出鬼没なプレイヤー……か。

実に心惹かれるシナリオだな。

とにもかくにも明日から山籠りならぬ洞窟籠りだな……引きこもりじゃないぞ？

これからの為にアイテムを揃えてまずは明日に備えよう。

本来の自分を偽って別の自分を演じる……ロールプレイとはよく言ったものだ。

「これより武力介入を始める……ってか？フフフ」

明日からが楽しみだよ、ほんと

第三クエスト（後書き）

え〜なんじゃこら？展開がおかしいにもほどがある。

まあ書いて経験を積むしかないんですけどね。

これからも頑張っていきますよ。

では作者の愚痴も少ないうちに

（．．）ノシ　バイバイ

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9178t/>

マジックソードオンライン（MSO）

2011年7月31日18時21分発行